

第1章 保存活用計画の目的

第1節 計画策定の沿革

(1) 高安山麓の古墳と高安千塚古墳群

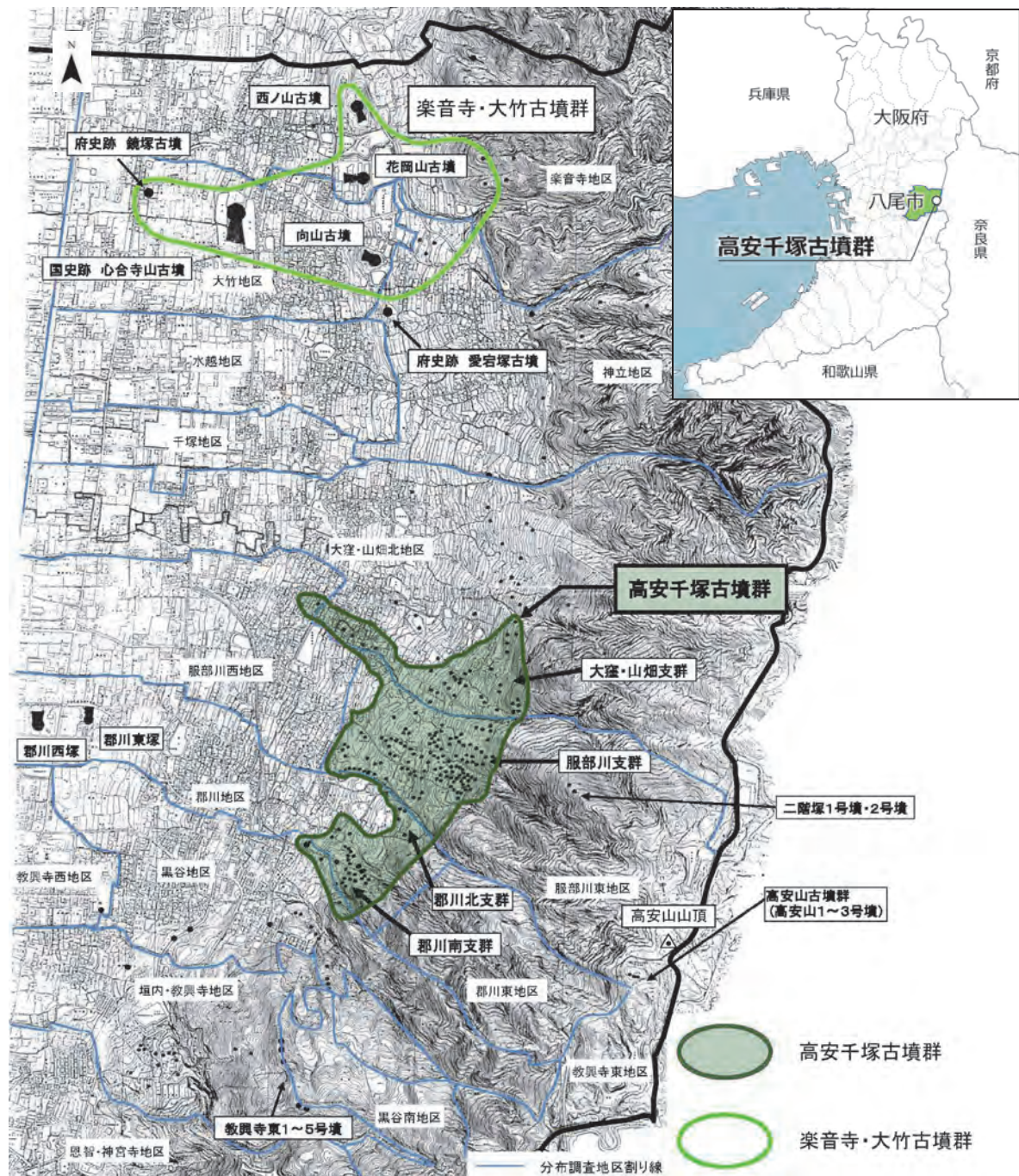


図 1-1 高安山麓の古墳と高安千塚古墳群の位置

表 1-1 高安山麓の後期古墳

古墳群名	地区名	後期古墳数		白石太一郎氏 ：1966年論文	花田勝広氏 ：2008年論文	備考
高安千塚古墳群	大窪・山畑支群	230	50	高安千塚 山畑支群	高安千塚 大窪・山畑南支群	
	服部川支群		137	高安千塚 服部川支群	高安千塚 服部川支群	
	郡川北支群		6		高安千塚 郡川支群	
	郡川南支群		37			
高安古墳群	楽音寺地区	5				
	大竹地区	0				
	神立地区	8			神立古墳群	愛宕塚古墳含む
	水越地区	0				
	千塚地区	0				
	大窪・山畑北地区	13			高安千塚 大窪・山畑北支群	
	服部川地区	2		高安千塚 服部川支群		二階塚上墳・二階 塚下墳
	郡川地区	2				郡川西塚古墳 郡川東塚古墳
	郡川東地区	2				
	教興寺西地区	2				
	黒谷地区	26			黒谷古墳群	
	垣内・教興寺地区	23			垣内・教興寺古墳 群	
	教興寺東地区	0				
	恩智・神宮寺地区	13			恩智・神宮寺古墳 群	
	高安山古墳群	3				高安山 1～3号墳
合 計		329				

大阪府八尾市の東部に位置する生駒山系の高安山麓は、豊かな歴史や文化財が多く残る地域で、特に古墳は 300 基以上残されている。

山麓部の北方には、中河内最大の前方後円墳である史跡心合寺山古墳に代表される古墳時代前期から中期の前方後円墳で構成される「^{しおんじやま}楽音寺・^{がくおんじ おおたけ}大竹古墳群」や、南方には古墳時代後期の前方後円墳である^{こおりがわにしづか}郡川西塚古墳と^{こおりがわひがしづか}郡川東塚古墳がある。そして、その東側に古墳時代後期に造られた府史跡^{あたごづか}愛宕塚古墳をはじめとして横穴式石室を持つ円墳を中心とした古墳が数多く分布している。この高安山麓に分布する古墳について、「高安古墳群」と呼んできた（図 1-1・表 1-1）。

高安古墳群は谷筋ごとに分けられ、そのうち大窪・山畑支群、服部川支群、^{おおくぼ やまたけ}郡川北支群、郡川南支群の 4 つの支群は、高安古墳群の 6 割以上を占める 230 基が集中している。この集中地区を高安古墳群の中でも特に「^{たかやすせんづか}高安千塚古墳群」と呼ぶことにした。高安千塚古墳群の「^{せんづか}千塚」の名称は、古くは安土・桃山時代の古文書、そして江戸時代を通じて、古墳がたくさんある場所として「千塚」と呼ばれたことに由来する。

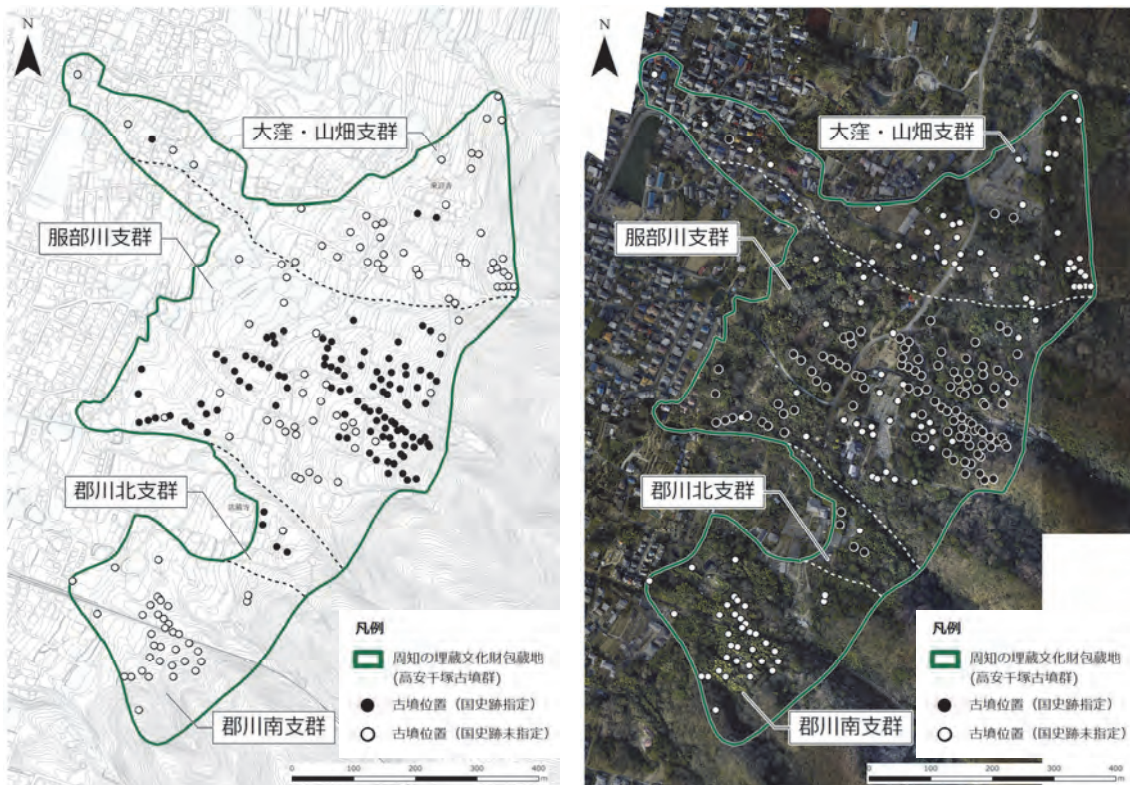
(2) 高安千塚古墳群の保存

高安千塚古墳群は、現在確認されているのは 230 基を数えるが、大正時代の分布調査(中河内郡役所編 1923)では 565 基の古墳があったとされる。石室石材の転用や開墾、近年では宅地や墓地等の開発、さらに経年劣化による石室の崩落、草木の繁茂によって、本来の姿が失われつつあり、古墳の保存が憂慮されている。また、山麓部裾を南北に通じる新たな農道の開通等によって、地域の活性化が期待される反面、不法投棄等が行われている場所もあるなど、古墳群をとりまく環境の悪化が懸念された。

加えて、高安千塚古墳群の 230 基中 137 基の古墳が集中し、中心支群である服部川支群は、農業振興地域で営農を原則としている農用地が大部分を占め、主に植木畑として利用されている。そのため、古墳を保存していく上で、植木畑での営農との共存も検討する必要がある。

このような状況を踏まえ、高安千塚古墳群を恒久的に保存するため、詳細な分布調査を終えた服部川支群を中心に史跡指定に取り組み、平成 27 年 3 月 10 日付で史跡指定された(指定の経過及び範囲は、第 1 章 第 3 節「史跡指定の概要」を参照)。

以下、本計画では、高安古墳群内の 4 つの支群で構成される範囲については「**高安千塚古墳群**」と呼称し、史跡指定の範囲については「**史跡高安千塚古墳群**」と呼ぶ。



第2節 高安千塚古墳群の価値

(1) 高安千塚古墳群の評価

史跡高安千塚古墳群を適切に保存し、次世代に確実に伝えるべき、史跡の歴史的な評価となる本質的価値について、史跡指定にあたっての文化庁による高安千塚古墳群の評価を踏まえた上で、整理する。

大阪府八尾市の東部に位置する高安千塚古墳群は、生駒山系の高安山麓の標高 60～180m前後の西側斜面に分布している。

高安千塚古墳群の存在は古くから知られており、延宝 7 年 (1679) の『河内鑑名所記』^{えんぼう}や享和元年 (1801) の『河内名所図会』^{かわちかがみめいしよき}などに記載がみられる。明治 12 年 (1879) には米国人研究者の E・S・モースが、さらに明治 14～21 年には英国人研究者の W・ガウランドが調査するなど、いち早く海外にも紹介されている。

昭和 35～37 年には、白石太一郎氏が分布調査を行い、昭和 41～43 年には大阪府教育委員会による分布調査と一部の古墳の墳丘測量と石室実測調査、昭和 48～49 年には有志による分布調査、昭和 61～平成 2 年には市民団体による分布調査が行われ、高安千塚古墳群の様相が明らかになっていった。

平成 16 年度からは、八尾市教育委員会が分布調査を中心とする基礎調査を開始した。また、分布調査と併行して、特徴的な古墳の墳丘測量や石室実測調査、さらには既往出土品の調査を行った。そして、これらの調査成果を総括した『高安千塚古墳群基礎調査総括報告書』を平成 23 年度に刊行した。

高安千塚古墳群の総数については、大正時代には 565 基あったとの記述もあるが、現在は 224 基が確認されている。谷筋ごとの分布状況から、北から大窪・山畑支群、服部川支群、郡川北支群、郡川南支群の 4 つの支群に分かれている。このうち、最も多く古墳が築かれているのが服部川支群で、その基数は 131 基に達する。墳形はほぼ全てが円墳であり、その直径は 8～27m である。埋葬施設については、現在確認されているものは全て横穴式石室である。その規模は石室長約 5～12m と小型であり、片袖式、両袖式、無袖式の 3 種類がある。玄室形態は長方形のものと方形のものの 2 系統が認められる。また服部川 25 号墳と郡川 11 号墳では、玄室部が 2 つ連なる二室構造をなす特異な形状の横穴式石室も確認されている。

6 世紀前半に郡川北支群を除く 3 つの支群において造営が開始され、大窪・山畑 6 号墳に代表されるように、片袖式の横穴式石室が構築される。この時期の特徴としては、郡川 16 号墳のように天井がドーム状をなす石室が構築され、かつ韓式系土器やミ

ニチュア炊飯具などが副葬品として出土する古墳が造営されるなど、渡来系要素が認められる。一方、古墳群の最盛期である6世紀後半には渡来系要素は稀薄になり、横穴式石室については郡川1号墳や服部川2号墳のように両袖式が出現する。また、石材の大型化や石積の規格が進んでいく傾向も認められる。古墳の造営は7世紀前半で終焉を迎え、このころには大窪・山畑5号墳のように小型で無袖の横穴式石室が作られるのみとなる。

このように、高安千塚古墳群は畿内有数の大型群集墳であるとともに、6世紀に当該地域に居住していた渡来系集団と地域社会との関係がうかがえることから、当該地域の歴史的および社会的状況を考える上で重要な事例である。

(月刊文化財 平成27年2月号より引用)

※注 上記の古墳総数224基は指定時の数で、後述する平成27年度のレーザ測量調査によって、服部川支群で新たな古墳を確認し、同支群で137基（古墳番号は140号墳まで付番。番号のうち、3基が欠番である。）、古墳群全体では230基になった（平成29年3月現在）。

上記の評価を踏まえて、高安千塚古墳群の本質的価値をまとめると、「**①畿内有数の大型群集墳**」、「**②渡来系集団と地域社会の関係がわかる古墳群**」の2つの価値を有するといえる。

(2) 高安千塚古墳群の本質的価値

①畿内有数の大型群集墳としての価値

高安千塚古墳群では、横穴式石室を主体とする古墳が大正時代の分布調査で 565 基あったとされるが、現在 230 基の古墳が高安山麓の標高 60～180m 前後の尾根上に良好に残っている。そのうち服部川支群の 137 基を中心に、北に大窪・山畑支群、南に郡川北支群、郡川南支群と 4 つの支群で構成される。

6 世紀代を中心に造られた円墳を中心とする古墳が密集しており、古墳時代中期から後期にかけての古墳築造の画期となる群集墳について理解できる古墳群である。

畿内で 150 基以上の古墳からなる主な大型群集墳は 13 ヶ所あり、そのうち大阪府内には、生駒山系西麓に分布する北方の山畑古墳群（東大阪市：150 基以上(当初)）と南方の平尾山古墳群（柏原市：1,407 基）、大和川を隔てた金剛山系の一須賀古墳群（南河内郡河南町：262 基）がある。高安千塚古墳群は、これらの中でも横穴式石室を主体とする畿内有数の大型群集墳の代表例として重要である。

造墓時期は、平尾山古墳群が 6 世紀から 7 世紀代まで続くのに対し、高安千塚古墳群は、同じく 6 世紀に始まるが、7 世紀に入ると造墓活動が終息に向かう。大型群集墳の造墓は、ヤマト政権やその有力氏族の影響下にあったと考えられるが、高安千塚古墳群においては、大型の石室の築造時期が限られるなどの特徴があり、それらは中河内の有力氏族である物部氏の消長を反映したと考えられている。

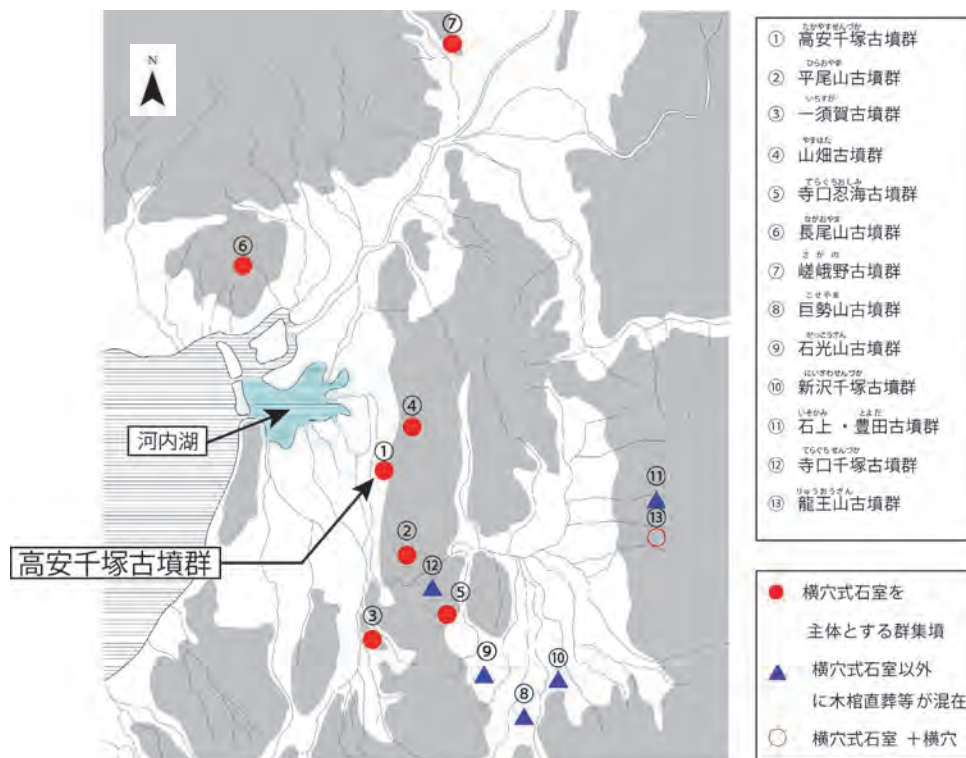


図 1-3 畿内の大型群集墳の位置

②渡来系集団と地域社会の関係がわかる古墳群としての価値

高安千塚古墳群では、6世紀前半の造墓開始期に、朝鮮半島を起源とした横穴式石室導入期にみられるドーム状天井の石室や、渡来系の土器である韓式系土器やミニチュア炊飯具の副葬品があり、渡来系集団また渡来系集団に関わりを持つ人々が葬られていたと考えられる。こうした渡来系集団は、古墳群の眼下に広がる、朝鮮半島や大陸からの玄関口であった河内平野に数多く居住しており、新進の技術や文化を持ち、重要な役割を担っていた。

同じ生駒山系西麓で高安千塚古墳群の北方に位置する山畑古墳群は、渡来系の副葬品がなく、在地性の強い群集墳と考えられている。一方、南方にある平尾山古墳群は、^{かんざし}簪やミニチュア炊飯具などの渡来系の副葬品が多くみられ、高安千塚古墳群と同様に渡来系集団との強いつながりがあったと考えられる。

その後、最盛期の高安千塚古墳群では、ヤマト政権の中心地である大和地方の大型の横穴式石室に準じる規模の石室が数多く造られるなど、これら生駒山系西麓の他の群集墳にはみられない特徴をもっている。

石室や副葬品の特徴や造墓の動向から、河内平野の渡来系集団が在地化する過程でヤマト政権の中枢をなす有力氏族と深いつながりを持ち、有力な集団に成長していったことがわかる。

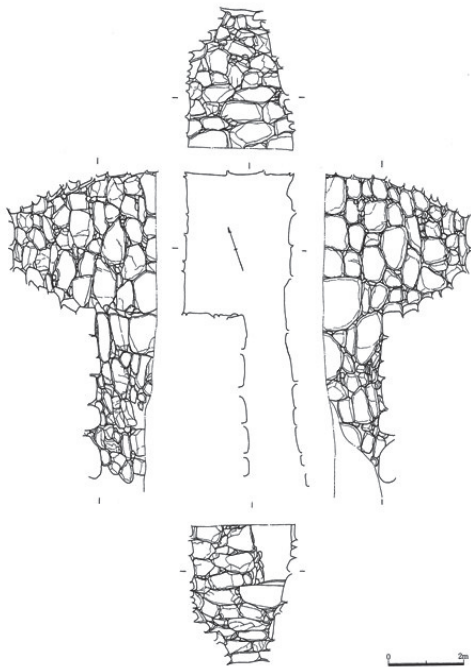


図 1-4 朝鮮半島を起源とする埋葬施設：
ドーム状天井の横穴式石室（6世紀
前半・郡川 16 号墳）



図 1-5 渡来人との関わりを示す副葬品：ミニチュア炊
飯具・韓式系土器（6世紀前半・郡川 16 号墳出土）



図 1-6 大和地方の大型横穴式石室に準じる玄室面積を有する石室
(6世紀後半・服部川7号墳)



図 1-7 ヤマト政権との関わりを示す副葬品：金銅装圭頭大刀
(7世紀前半・服部川支群 伝森田山古墳出土)

第3節 史跡指定の概要

(1) 指定の経過

高安千塚古墳群を恒久的に保存するため、史跡指定を視野に入れた調査を平成16年度から開始した。調査を進めるにあたっては、平成17年度以降、学識経験者や関係自治体等による「高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議」を開催し、調査及び保存活用に関する意見を聴取した。この会議での意見を踏まえ、平成21年度までに4支群の分布調査、さらに詳細な調査として、服部川支群の詳細な分布調査と墳丘測量調査や古墳群を特徴づける重要な古墳の石室の実測調査、また過去に出土した副葬品の整理等を行った。

これらの調査成果を踏まえ、平成17年度から平成20年度にかけて、郡川1号墳(開山塚古墳)、郡川2～4号墳、服部川25号墳(二室塚古墳)石室、大窪・山畑7号墳、同8号墳を市指定史跡にしている。平成19年度には、花田勝広氏による高安古墳群の主要な石室実測の調査研究の成果をまとめた『高安古墳群の基礎的研究』(市教委2008)を刊行した。

そして、平成23年度に、これらの調査、研究の成果等を踏まえて、高安千塚古墳群の学術的な価値を位置づけた『高安千塚古墳群基礎調査総括報告書』(市教委2012)を刊行した。

また、史跡指定に向けて高安千塚古墳群の普及啓発に取り組み、シンポジウムや講演会の開催、普及冊子やシンポジウム記録集等の刊行、出土品をモチーフにしたキャラクターの作成などの事業を行った。さらに平成25年度に高安千塚古墳群の将来の保存活用にむけた基本方針を検討する「高安千塚古墳群保存活用事業基本構想」を策定した。

そして、土地所有者の理解を得て、平成26年7月に史跡の意見具申を行い、高安千塚古墳群の価値が認められ、同年11月21日の文化審議会で指定の答申を受け、文化財保護法第109条に基づき平成27年3月10日付け文部科学省告示第38号により史跡指定された。さらに同年7月7日に八尾市が史跡にかかる管理団体の指定を受けた。

史跡指定された範囲は高安千塚古墳群の一部であり、個々の古墳の特徴や価値の全容が明らかになっているわけではない。今後も継続的な調査・研究を進め、古墳群全体の価値づけをしていく必要がある。

表 1-2 史跡指定に至る経過

年度	調査	保存活用の検討	普及啓発
平成16年度	郡川1号墳(開山塚古墳)墳丘測量・石室実測調査		郡川1号墳(開山塚古墳)を市史跡に史跡(H17.3.17)
平成17年度	服部川支群詳細分布調査 郡川4号墳墳丘測量・石室実測調査	第1回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H18.2.21)	モースがスケッチした開山塚古墳現地説明会(200人参加) 郡川2～4号墳を市史跡に指定(H18.3.20)
平成18年度	大窪・山畑支群詳細分布調査 服部川25号墳(二室塚古墳)墳丘測量・石室実測調査	第2回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H18.8.3) 第3回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H19.3.26)	服部川25号墳(二室塚古墳)石室を市史跡に指定(H19.3.19)
平成19年度	郡川支群(のちに郡川南、北支群に細分)詳細分布調査 大窪・山畑6・7・8号墳墳丘測量 『高安古墳群の基礎的研究』刊行	第4回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H19.9.6) 第5回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H20.3.27)	高安古墳群 講演会開催 『高安古墳群を歩こう』刊行 大窪・山畑7号墳・8号墳を市史跡に指定(H20.3.21)
平成20年度	服部川支群東側測量調査、出土遺物整理調査	第6回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H20.5.16) 第7回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H21.3.25)	第1回高安千塚シンポジウム開催(11月23日・330人参加・市制60周年記念) 『高安千塚シンポジウム 記録集』刊行
平成21年度	服部川支群西側測量調査、出土遺物整理調査	第8回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H22.3.19)	第2回高安千塚シンポジウム開催(11月23日・144名参加) 『高安千塚シンポジウム 記録集2』、『やおの歴史遺産 高安千塚』刊行
平成22年度	出土遺物整理調査	第9回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H22.8.5) 第10回高安古墳群等保存・調査計画検討会議(H23.3.9)	第3回高安千塚シンポジウム開催(10月31日・100名参加) 『高安千塚シンポジウム 記録集3』、『出土遺物が語るやおの歴史遺産高安千塚』刊行
平成23年度	周知の埋蔵文化財包蔵地の遺跡名を「高安千塚古墳群」とする。(H24.3.19) 『高安千塚古墳群基礎調査総括報告書』刊行		『八尾市高安山史跡散策マップ』刊行
平成24年度		「高安千塚古墳群保存活用事業基本構想」の検討	

平成 25 年度		「高安千塚古墳群保存活用事業基本構想」の策定	
平成 26 年度	史跡指定意見具申(H26.7) 史跡指定答申(H26.11.21) 史跡指定告示(H27.3.10)		
平成 27 年度	史跡管理団体の指定(H27.7.7)		『やおの歴史資産 国史跡高安千塚古墳群～知ろう、歩こう～』刊行



図 1-8 高安千塚古墳群に関する普及冊子

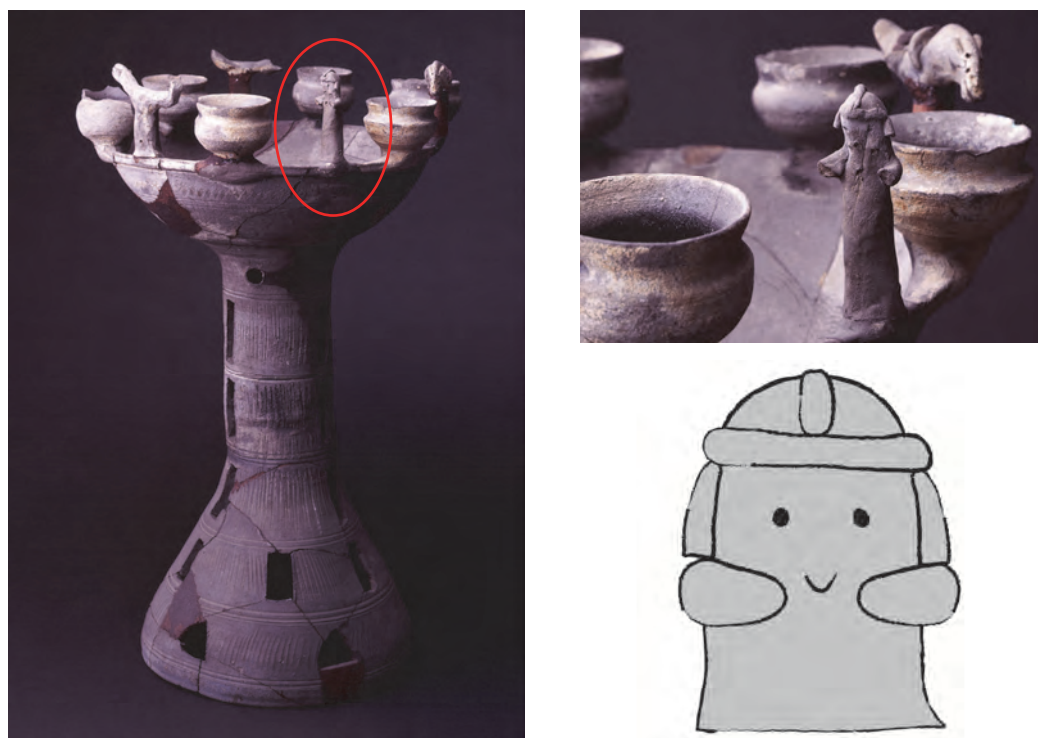


図 1-9 大窪・山畑 49 号墳出土の^{そうしよくつきすえき}装飾付須恵器をモチーフにしたキャラクター・はしづか君

(2) 指定の状況

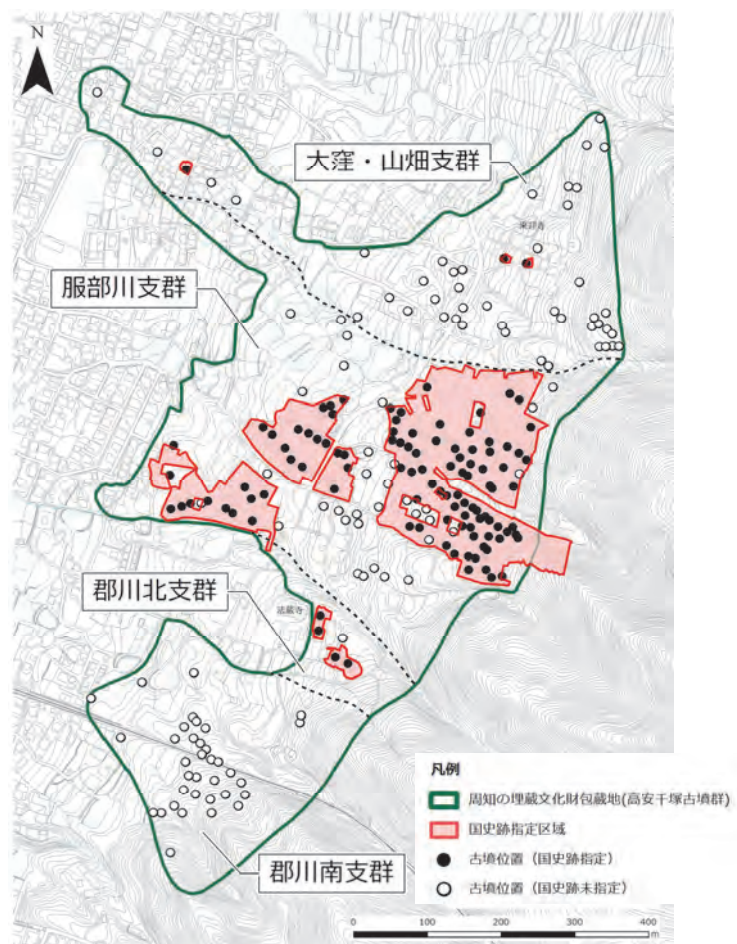


図 1-10 史跡高安千塚古墳群の指定範囲

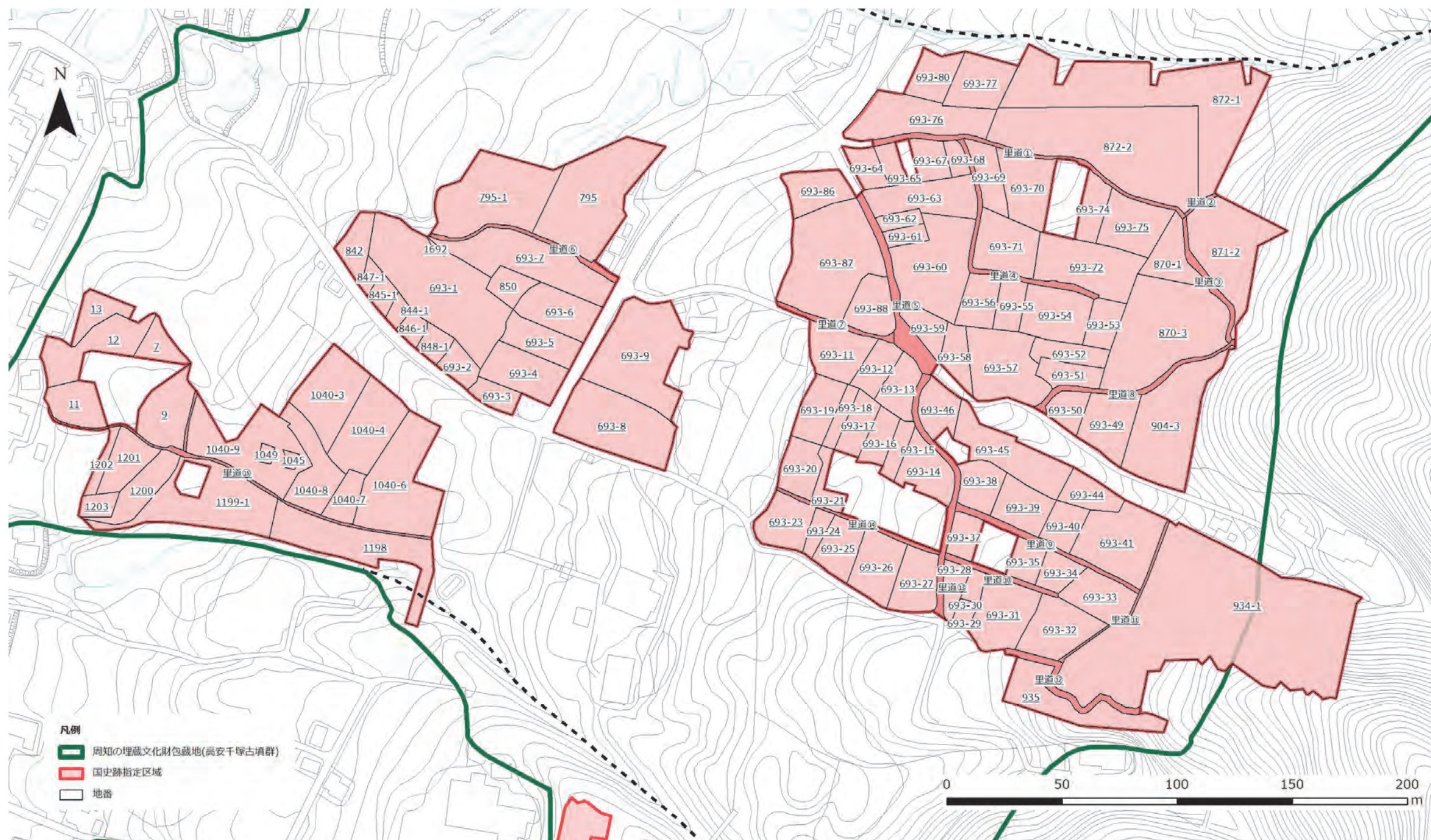
高安千塚古墳群は、4つの支群の「服部川支群」(約 18.8 万 m^2 ・137 基)、「大窪・山畑支群」(約 11.4 万 m^2 ・50 基)、「郡川北支群」(約 1.8 万 m^2 ・6 基)、「郡川南支群」(約 7.5 万 m^2 ・37 基)で構成される南北約 1 km の範囲(合計約 39.5 万 m^2)に合計 230 基の古墳が分布する。そのうち、史跡指定の範囲(史跡高安千塚古墳群)は、「郡川南支群」を除く「服部川支群」と「大窪・山畑支群」、「郡川北支群」の 3 支群 110 基の古墳を含む 63,740.76 m^2 である。服部川支群の 102 基の古墳を中心に、大窪・山畑支群の 3 基、郡川北支群の 5 基の古墳が史跡指定の範囲にある(表 1-3)。

表 1-3 史跡高安千塚古墳群の範囲

支群名	範囲／対象		指定面積
服部川支群	102 基	南北約 300m、東西約 500m	61,586.53 m^2
大窪・山畑支群	3 基	大窪・山畑 6、7、27 号墳	334.40 m^2
郡川北支群	5 基	郡川 1、2、3、3-B、4 号墳	1,819.83 m^2
合 計	110 基		63,740.76 m^2

表 1-4 指定の内容

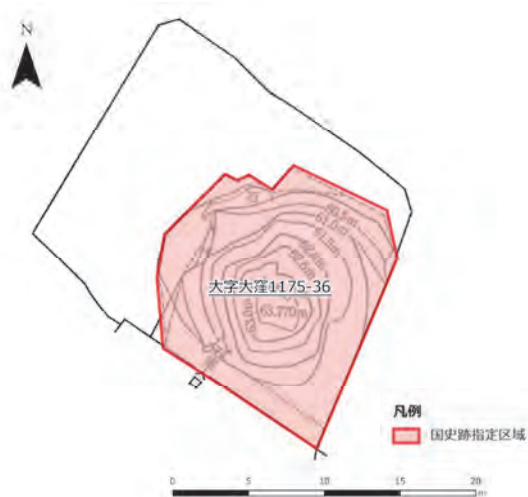
指定等種別、 年月日及び告示番号		平成 27 年 3 月 10 日 史跡指定 文部科学省告示第 38 号
名称		高安千塚古墳群
所在地及び地域	大阪府八尾市 大字服部川	693-1、693-2、693-3、693-4、693-5、693-6、693-7、693-8、693-9、693-11、 693-12、693-13、693-14、693-15、693-16、693-17、693-18、693-19、693-20、 693-21、693-23、693-24、693-25、693-26、693-27、693-28、693-29、693-30、 693-31、693-32、693-33、693-34、693-35、693-37、693-38、693-39、693-40、 693-41、693-44、693-45、693-46、693-49、693-50、693-51、693-52、693-53、 693-54、693-55、693-56、693-57、693-58、693-59、693-60、693-61、693-62、 693-63、693-64、693-65、693-67、693-68、693-69、693-70、693-71、693-72、 693-74、693-75、693-76、693-77、693-80、693-86、693-87、693-88、795、795-1、 842、844-1、845-1、846-1、847-1、848-1、850、870-1、870-3、871-2、872-1、 872-2、904-3、934-1、935 のうち実測 769.79 平方メートル、1040-3、1040-4、 1040-6、1040-7、1040-8、1040-9、1045、1049、1198、1199-1、1200、1201、1202、 1203、1692
	同 服部川九丁目	7、9、11、12、13
	同 大字大窪	34-1 のうち実測 183.15 平方メートル、1175-36
	同 郡川六丁目	1 のうち実測 1404.07 平方メートル、2 のうち実測 415.76 平方メートル
	右記の地域に 介在する 道路敷	大字服部川 693-7 に北接する道路敷 大字服部川 693-13 と同 693-46 に挟まれ、同 693-27 と同 693-28 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 693-13 と同 693-59 に挟まれ同 693-87 に南接するまでの道路敷 大字服部川 693-20 と同 693-23 に挟まれ、同 693-22 と同 693-27 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 693-28 と同 693-37 に挟まれ、同 693-32 と同 693-34 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 693-32 と同 935 に挟まれ、同 934-1 と同 935 に挟まれるまでの道路 敷のうち実測 210.73 平方メートル 大字服部川 693-33 と同 693-41 に挟まれ、同 693-37 と同 693-38 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 693-59 と同 693-88 に挟まれ、同 693-63 と同 693-87 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 693-65 に北接し、同 693-75 に北接するまでの道路敷 大字服部川 870-1 と同 871-2 に挟まれ、同 870-3 と同 871-3 に挟まれるまで の道路敷 大字服部川 934-1 に西接する道路敷 服部川九丁目 11 と大字服部川 1205 に挟まれ、大字服部川 1040-6 と大字服部川 1198 に挟まれるまでの道路敷
	備考	一筆の土地及び道路敷のうち一部のみを指定するものについては、地域に関する 実測図を大阪府教育委員会（現大阪府教育庁）及び八尾市教育委員会に備え置い て縦覧に供する。





※この図面は、史跡指定の資料であり、土地の権利関係をあらわしたものではない。

図 1-12 大窪・山畑 6 号墳、7 号墳 史跡指定地地籍図（縮尺 1/500）

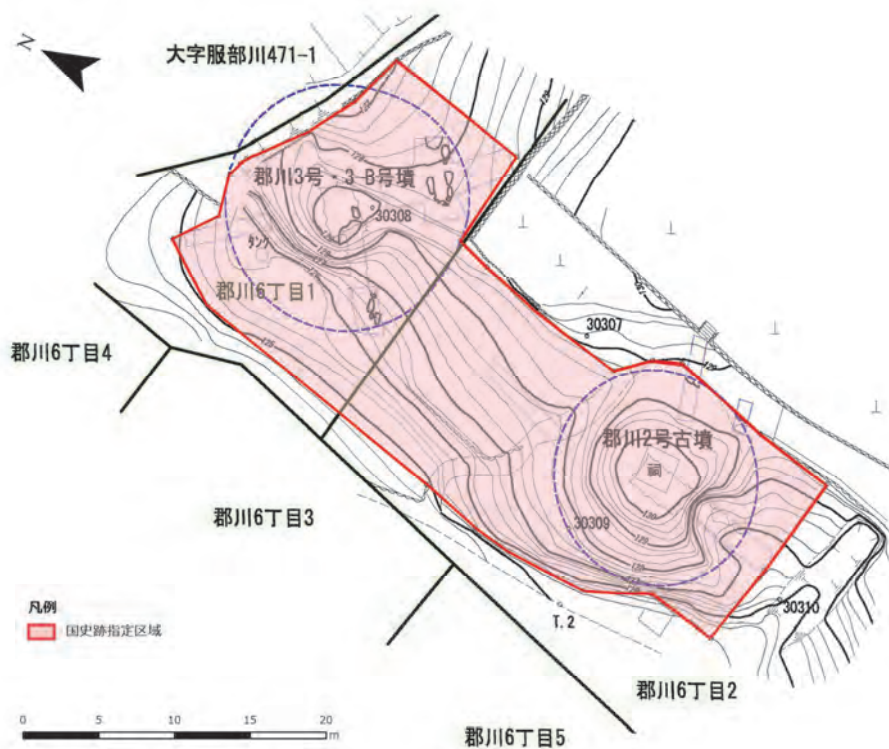


※この図面は、史跡指定の資料であり、土地の権利関係をあらわしたものではない。

図 1-13 大窪・山畑 27 号墳 史跡指定地地籍図（縮尺 1/500）



※この図面は、史跡指定の資料であり、土地の権利関係をあらわしたものではない。
図 1-14 郡川 1 号墳、4 号墳 史跡指定地地籍図（縮尺 1/500）



※この図面は、史跡指定の資料であり、土地の権利関係をあらわしたものではない。
図 1-15 郡川 2 号墳、3 号墳、3-B 号墳 史跡指定地地籍図（縮尺 1/500）

第4節 計画の目的

本計画は、将来にわたって史跡高安千塚古墳群の価値を良好な状態で保つために管理を適切に行う「保存管理」と、郷土の歴史や文化を学び、情報発信していく「活用」、さらに史跡を保存しつつ、その価値を着実に伝えていく場としての「整備」についての基本方針を定めた「保存活用計画」を策定するものである。

さらに、「保存管理」と「活用」、「整備」を円滑かつ確実に進め、地域とともに高安千塚古墳群を継承していくための体制や今後の経過観察のあり方等についても定める。

本計画の対象とする範囲は、史跡指定地を基本とする（図 1-10～15）。ただし、高安千塚古墳群の各支群の未指定の範囲や、周辺の高安千塚古墳群と密接に関係する古墳についても検討を行う。

高安千塚古墳群がもつ基本的な価値とその構成要素、取り巻く歴史や自然、社会環境を含む現状を把握し、現状の課題を抽出し、以下の内容を検討する。

①保存管理

史跡の本質的価値を把握し、それらを損なうことなく「保存管理」を図るための方針や方法、文化財保護法に基づく現状変更の許可に関する取扱基準等を定める。

さらに、史跡を保存していく上で今後必要となる史跡指定地の公有化について、検討する。

②活用

史跡の本質的価値だけでなく、古墳群の歴史的な立地や景観等を活かし、現在及び将来における公開やその他の「活用」についての基本的な方針を定める。

貴重な歴史資産であり、地域資源としての価値をも有する高安千塚古墳群が新たな魅力となるよう、高安山麓の歴史や自然環境を視野に入れた活用を検討する。

③整備

「保存管理」と「活用」の方針を踏まえ、「保存管理」するための整備、「活用」するための整備の方法を検討する。

また、山麓部に立地することから、今後想定される災害等への対応も検討する。

図 1-16 高安山麓の景観



高安山麓の古墳

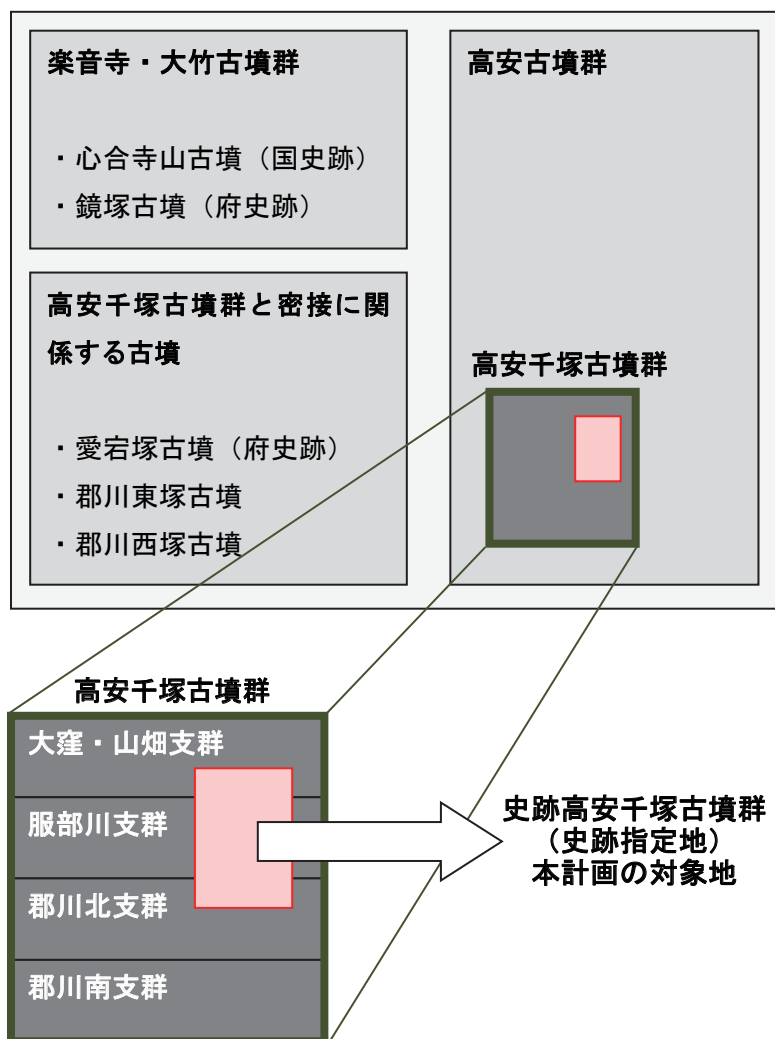


図 1-17 保存活用計画の位置づけの概念図

第5節 計画策定に向けた経過

「高安千塚古墳群保存活用計画」の策定にあたって、高安千塚古墳群の保存及び活用に関する事項の調査、審議を行う「八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会」を設置した。平成27～28年度の2ヶ年で計5回の審議会を行い、保存活用計画として取りまとめ、答申を受けた。

①八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会の組織

■委員

白石 太一郎	(大阪府立近つ飛鳥博物館 館長)	会長
増渕 徹	(京都橘大学 文学部 歴史学科教授)	副会長
瀧浪 貞子	(京都女子大学 名誉教授)	
一瀬 和夫	(京都橘大学 文学部 歴史遺産学科教授)	
清野 孝之	(奈良文化財研究所 都城発掘調査部考古第三研究室長)	
恵谷 浩子	(奈良文化財研究所 文化遺産部景観研究室研究員)	
福田 祐美子	(市民委員)	

■助言者

文化庁 文化財部 記念物課
大阪府教育庁 文化財保護課

■事務局

八尾市教育委員会 文化財課

②審議会の開催経過

■第1回 八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会

日時：平成27年12月22日（火） 15時～17時

場所：八尾市立青少年センター会議室

出席委員：白石会長、増渕副会長、瀧浪委員、一瀬委員、清野委員、恵谷委員、福田委員

議事：会長・副会長の選出

高安千塚古墳群の現状と課題（報告）

保存活用計画の策定の諮問

■第2回 八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会

日時：平成28年3月1日（火） 10時30分～12時

場所：八尾市役所 701 会議室

出席委員：白石会長、増渕副会長、瀧浪委員、一瀬委員、清野委員、福田委員

議事：現況調査の進捗（報告）

保存活用計画の構成と目的

保存活用計画の内容：第 1 章～第 5 章の一部

■第 3 回 八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会

日時：平成 28 年 7 月 29 日（金） 14 時～17 時 30 分

場所：八尾市立山本コミュニティセンター 3 階 301 会議室

出席委員：白石会長、増渕副会長、瀧浪委員、一瀬委員、清野委員、福田委員

議事：現況調査について（報告）

保存活用計画の内容：第 1 章～第 5 章

■第 4 回 八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会

日時：平成 29 年 1 月 13 日（金） 14 時～16 時 30 分

場所：八尾市役所 605 会議室

出席委員：白石会長、増渕副会長、一瀬委員、清野委員、恵谷委員、福田委員

議事：保存活用計画の内容：第 1 章～第 10 章

■第 5 回 八尾市高安千塚古墳群保存活用審議会

日時：平成 29 年 3 月 13 日（月） 14 時～15 時

場所：八尾市役所 605 会議室

出席委員：白石会長、瀧浪委員、一瀬委員、福田委員

議事：保存活用計画の答申